

植物と生活

地域環境科学部 造園科学科 造園植物・樹芸研究室

教授 鈴木 貢次郎

な研究を基本にしながらもやや応用的な見地を強めるため、平成29年度から造園植物・樹芸研究室になりました。「芸」は「藝」の省略形で、「藝」は「草木を植える」意味になります。

拝金主義が当然のように漂う現代社会の中、今や公園や街路樹、庭園の植物までも邪魔もの扱いになることが多く、不要になれば伐採処理、気付けば消耗品扱いになっています。こんな状況の中、私たちの研究室では、古典的かつ時代に合った植物と生活の関係を探求し、生物界に生きる一員としての真の豊かさを求めています。

植物は語る

例えば、「都内にある六義園にクスノキの巨木が多いのはクスノキを有用植物として重んじた岩崎弥太郎が一時期所有していたから」など、植物調査を通じて社会背景や歴史を学ぶことができます。そのことは、里山の植物でも同じこと。フィールドワークで二次林や竹林、その林床植物などの保全活動や地域の小学校への環境教育などを行いながら調査研

究に臨んでいます＝写真①。

これまで、大学院生や学部生を中心に、里山や庭園の植物、巨木・老木、日本の国花であるサクラ、街路樹などを研究材料に取り上げ、植物の繁殖習性や植栽・管理技術、樹木医、文化的背景について、アジア諸国（タイ、中国、台湾、フィリピンなど）で調査してきました。

中でもサクラの研究は、金澤弓子准教授を中心に、ソメイヨシノに代わる早咲き性サクラの作出に関わる諸問題を取り扱っています。カワツザクラやアタミザクラをはじめとし、早咲き性サクラの親種を遺伝子レベルで探ると共に、再現試験による作出と新たな繁殖法の開発に成功を収めました。

里山の植物については自治体と地域連携し、神奈川県川崎市麻生区にある早野梅ヶ谷特別緑地保全地区の林床植物としての希少植物（タマノカンアオイなど）や、低木、高木の保全研究を10年以上継続し、希少となってしまった植物の生態や要因を明らかにしてきました。巨木・老木の研究については、その地域



①地域小学生と研究室員との共同による川崎市麻生区にある早野梅ヶ谷特別緑地保全地区の保全活動



②英国での調査・学習の巨木・老木

での役割や、長年守られてきた社会背景や地形、その種の特性など、国内だけでなく英国や台湾、中国南西部まで足を延ばし、これらの地域の文化や植物の生態などとも比較・考察しています＝写真②。

生活を潤すはずであった街路樹も、今や都市の嫌われものになることが多いようです。倒木原因などを里山の植物の調査結果などから比較・考察し、これまであまり言及されてこなかった土壌の物理性と植物の生育に関わる問題などを調べ、土壌の物理性の改善の重要性を訴えています＝写真③。



③東京都町田市での街路樹倒木後の土壌調査

つなぐ

研究室内の研究内容をつなげることが、研究室の看板になることはもちろんであり、そのためには、研究室内の研究・教育体制をつなげることが使命になります。社会と研究室、フィールドと実験室、理論と実践、都市と地域、自然と人工、日本と世界（国際化）、社会科学と自然科学、そして時間を要する木本を取り扱う研究であるからこそその先輩と後輩、教員と学生というチームワークを重視しています。中でも国際化については、近々の課題です。造園植物に関わるさまざまな問題が、世界的に共通する問題として取り上げられています。日本の樹芸（Arboriculture）は、世界に誇ることができる伝統ある高度技術です。造園・園芸立国の英国の学会などに積極的に参加する一方、フランス、中国、フィリピン、ミャンマーなど、さまざまな国からの留学生の受け入れと交流を行い、多様性を実現しています。